

ワーグナー (1813-1883)

歌劇『タンホイザー』序曲 (ドレスデン版) WWV70 (約14分)

リヒャルト・ワーグナー (1813-1883) は、いうまでもなくドイツが生んだ舞台音楽作品の巨匠である。はじめはロマン的なオペラの伝統にのっとりてグランド・オペラを生み出していったが、19世紀後半ばをすぎたころから、その伝統を破って、音楽、劇、文学、美術等を融合した総合芸術としての「楽劇 Musikdrama」を創始することになる。したがって、台本はすべてワーグナー自身が書いたものである。

本日の1曲目は、ワーグナーがドレスデン宮廷歌劇場の指揮者だった1845年10月(32歳)に完成した、3幕からなる大ロマン的オペラ『タンホイザーとヴァルトブルク城の歌合戦』の序曲。オペラとしての初演は同年10月19日だが、現在演奏される序曲は、初演後から1851年9月にかけての改訂期に手直しされた版、いわゆる「ドレスデン版」である。

物語は、中世の騎士で恋愛歌人のタンホイザーを主人公とする。彼は女神ヴェーヌスと愛欲にふけている。ヴァルトブルク城でひんしゆくを買った歌合戦のあと、エリーザベト姫のとりなしでローマへ巡礼の旅に出るが、教皇はタンホイザーの懺悔(ごんげ)を聞き届けず、赦免されなかった。彼は自暴自棄となるが、エリーザベトの自己犠牲によって、魂が救済される。

序曲は、ホルンとクラリネットによる巡礼の音楽(恩寵による救済のテーマ音楽)に始まり、中間部分の喧噪に満ちた音楽がバッカナール(饗宴)のモチーフ。高揚した部分はヴェーヌス(愛の女神)賛歌である。最後はふたたび救済の音楽となって、クライマックスを築く。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、打楽器(トライアングル、小太鼓、シンバル)、ティンパニ、弦楽5部

ピアソラ (1921-1992)

バンドネオン協奏曲『アコンカグア』

- I. アレグロ・マルカート (約7分)
- II. モデラート (約7分)
- III. プレスト - メランコリーなフィナーレ (約6分)

アルゼンチン・タンゴの革命児、アストロ・ピアソラといえば、チェリストのヨーヨー・マやヴァイオリニストのギドン・クレメルの演奏でもおなじみだろう(詳しくは、斎藤充正・著『アストル・ピアソラ:闘うタンゴ』青土社を参照)。

彼は、**バンドネオン**(ドイツで発明された家庭楽器で、アコーディオンに似ているが、右手も左手も鍵盤ではなくボタンが配置されている)奏者でもあった。本日演奏されるバンドネオン協奏曲は、1979年にブエノスアイレス銀行からの委嘱により、ラジオ放送用に作曲されたという。楽譜には『**アコンカグア**』と題名が印刷されており、その下に「バンドネオン、弦楽器と打楽器のオーケストラのための協奏曲」と表記されている(表紙には『アコンカグア』の表記はない)。

このタイトルは、南米大陸最高峰(6,960.8m)の名である。アルゼンチンとチリの国境付近のアンデス山脈にそびえ立つ。日本のみなさまには、タレントのイモトが登頂を断念した山といったほうが、わかりやすいかもしれない。

ただし、この曲名は、曲の内容を表しているというよりも、協奏曲の知名度を

高めるための便宜上の手段と考えたほうがよいだろう。曲そのものは、クラシックの協奏曲形式とタンゴの音楽的特徴を融合させた、ピアソラならではの楽しめる音楽になっている。

この協奏曲には、ピアソラがバンドネオン独奏を担当した自作自演の録音もいくつかあるばかりか、映像でも複数の記録が残されている。そのどれもが骨格となる楽譜のままではなく、かなりアドリブで変形して演奏している。

今回は、バンドネオンに発音原理がかなり近い**アコーディオンでの演奏**となるが、ソリストの御喜美江によると、「ピアソラ自身がよく使う装飾は譜面に書いていなくても取り入れる」が、「譜面からほとんど離れて自身のアドリブをするといったことはしません」とのこと。なぜなら、「ピアソラのシンプルで素朴なメロディとハーモニーが大好きなので、ピアソラ特有の装飾以外は手を加えない」で、「そのまま[楽譜のまま]のほうがより人の心に届く」と考えるからだという。

指揮者の佐渡裕は、この協奏曲を2013年には御喜と協演しているし、翌年には小松亮太と「題名のない音楽会」で取り上げており、かなり曲を深く研究しているそうだ。今回、御喜との再協演で、進化したピアソラが楽しめることだろう。

第1楽章 歯切れのよいアレグロの

楽章。ソロ楽器を含めて、いきなり全員で音楽が開始される。4拍子だが、八分音符で「タタタ/タタタ/タタ」という**タンゴのリズム**が特徴的。開始後約3分でアコーディオン単独の**カデンツァその1**、約5分で**カデンツァその2**が挿入されている。艶やかな弦楽器の響きと、メリハリをもたらす打楽器、哀愁を帯びたアコーディオンが、ピアソラ節をかきたてる。

第2楽章 モデラート(中庸なテンポ)の緩徐楽章。ピアソラにはよく出てくる**ミロンガ**(舞曲の形式)との関連も指摘される。この楽章は冒頭約2分にわたって、アコーディオンの独奏がつづく。そこにヴァイオリン・ソロ、その後チェロ・ソロがハープ伴奏で加わっていく。

ブラームス (1833-1897)

交響曲第1番 八短調 作品68

- I. ウン・ポーコ・ソステヌート - アレグロ (約18分)
- II. アンダンテ・ソステヌート (約8分)
- III. ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ (約6分)
- IV. アダージョ - ピウ・アンダンテ - アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオー - ピウ・アレグロ (約18分)

音楽思想の面でワーグナーと激しく対立したブラームスのはじめての交響曲である。作曲の背景には、**ワーグナー**

歌心に満ちた楽章で、何回かの劇的瞬間を経て、最後は最弱音で消えていく。

第3楽章 大きく2部構成の楽章。**前半はプレスト**(非常に急速なテンポ)で、やはりタンゴのリズムによる情熱的な音楽である。3分ほどでいったん音楽が途切れると、中庸なモデラートにテンポ・ダウンし、**後半部分「メランコリーなフィナーレ」**に入る。さらにテンポが重々しくなると、いよいよ楽曲全体の終結部(コーダ)となる。アコーディオンの和音のクレッシェンド、弦楽器群のグリッサンドが特徴的で、最後は打楽器も派手に打ち鳴らされて、曲を閉じる。

[楽器編成] ティンパニ、打楽器(トライアングル、ギロ、大太鼓)、ピアノ、ハープ、弦楽5部、独奏バンドネオン(アコーディオン)

陣営に惨敗していた状況があろう。つまりこの交響曲は、ワーグナーのあのスペクタクルな超大作『ニーベルングの指環』が初演された1876年に、いわば慌てて作曲されたのだ。一刻も早く、純粹器楽による交響曲でワーグナー陣営に対抗しなければならぬ、危機的状況だったのである。

ベートーヴェンの後継者として認められるために、さまざまな仕掛けがこの曲には仕込まれた。『運命』と同じ八短調、タタタ/ターという「運命リズム」、「暗

黒から明へ」「苦悩から勝利へ」という楽曲構成の図式。トロンボーンを終楽章でしか用いないことも、『運命』と同じである。さらには、第4楽章の主要主題が、まるで第九の「喜びの歌」を連想させるメロディであることも、意図的だろう。

援護射撃も大きな力となった。ハンズ・フォン・ビューローはこの曲のことを「ベートーヴェンの第10番」と呼んで、ブラームスの交響曲がベートーヴェンの第九につづく正統な交響曲であることを宣言した。さらにビューローは、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの3人はみな「B」ではじまる名前だと、「**ドイツ大B**」というキャッチコピーを生み出した（詳細は、全音新版ブラームス・スコアの解説を参照）。

今日では、これらのきな臭いキャッチコピーなしに、ブラームスの交響曲は十分理解されるようになった。保守的なように聴こえて、じつはかなり前衛的な作曲も行っていることも、ぜひお聴きいただきたい。

第1楽章 序奏部をもつソナタ形式の楽章。冒頭からヴァイオリン群によつ

て奏される「半音階」(ドー・ド#ー・レー…など)は、交響曲全体を通していたるところで耳にすることができる重要な作曲素材である。

第2楽章 アンダンテの、美しい緩徐楽章。ホ長調なのに愁いを含んだ響きは、ブラームスならではの。最後にホルン独奏と、それを彩るヴァイオリン独奏が聴きどころだ。

第3楽章 伝統的にはスケルツォかメヌエットの楽章になるはずだが、ブラームスの場合、「間奏曲(インテルメツォ)」のようである。

第4楽章 序奏つきの、ソナタ形式による楽章。あきらかにベートーヴェンの『運命』交響曲以来の、「苦悩から勝利へ」「暗から明へ」の内的プログラムをもつ。アルペン・ホルンを模した旋律は、ブラームスが1868年にアルプスで聴き取り、クララ・シューマンの誕生日に捧げた旋律である。最後は熱狂的な音楽となり、勝利のなかで幕を閉じる。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部